

2025（令和7）年度 卒業時アンケート調査結果の分析

IR 委員長 伊木亜子

2026年3月14日に卒業した学生を対象に実施したアンケート調査の結果について、以下の通り分析した。回答数は、保育学科33名（回収率100%）、食物栄養学科34名（回収率100%）であった。

1. 保育学科

設問2「本学での授業や活動を通して、自身が成長したと思いますか」について

5点満点で回答を求めた。その結果「5点」が61%（昨年度48%）、「4点」が33%、「3点」が6%であった。昨年度より「5点」が13ポイント上がった。約9割の学生が自分自身の成長を感じていることがわかる。

設問3「成長できた、と思うきっかけや経験を教えてください」について

自由記述で回答を求め、例年と同じく「実習での経験」について記述したものが16件と多かったが、加えて「成長できた」「変わった」など、成長実感に関する記述が11件、「授業・専門性」が8件、「挑戦・積極性」「コミュニケーション力」が各6件と続いた。

設問4「在学中に力をいれて取り組んだ項目を選んでください」について

選択式で複数回答を求めた。結果は昨年度と同様に「短大の勉強」（21人）が最も多かった。次いで「クラブ・サークル」（17人）、「資格習得」、「アルバイト」（各16人）、「学内行事参加」（12人）が多く、「クラブ・サークル」や「学内行事参加」に取り組む様子が見られた。

設問5「本学での授業や活動を通して身に付いたと考える項目を選んでください」について

ディプロマポリシーの7項目とその他を加えた8項目から、選択式で複数回答を求めた。その結果、例年と同様に「知識」「技能」が身に付いたという回答が多く、次いで「コミュニケーション力」が多かった。

設問6「本学の教育内容にどの程度満足していますか」および、設問7「本学の評価できる、評価できない、不足している教育内容を記載してください」について

本学の教育内容について10点満点で評価を求め、評価できる点および評価できない点を記述してもらった。「10点」と回答した学生は36%、「9点」は18%と約半数の学生が本学の教育内容に特に満足していると言える。次いで「8点」が27%、「7点」が18%と、6点以下の評価は無く、保育学科学生全体が本学の教育内容に満足しているという評価であった。

評価できる点では、教職員の支援体制であり、親身になり学生との距離が近く感じられたことが示された。また、ピアノ指導や集いの広場の活用といった実践的な学び、授業の分かりやすさが示された。一方、評価できない、不足している点に対する意見は無かった。

設問8「もし身近に進学希望者がいる場合、本学を勧めたいと思いますか」について

5点満点で回答を求めた。その結果「5点」が55%(昨年度57%)、「4点」が27%、「3点」が18%であった。

設問9「卒業後の進路は希望に沿ったものですか」について

5点満点で回答を求めた。その結果「5点」が70%(昨年度65%)、「4点」が18%であり、9割以上の学生が希望通りの進路だと感じていることが示された。

設問10「函館短期大学に入学してよかったと思いますか」について

5点満点で回答を求めた。その結果「5点」が79%(昨年度68%)、「4点」が15%(昨年度26%)であり、9割以上の学生が入学してよかったと感じていることが示された。

以上より、保育学科卒業時アンケートの結果から、本学の教育は、教育課程、学生支援、学修成果の各側面において概ね良好に機能していることが確認できる。

教育課程に関しては、設問2において約9割の学生が「成長した」と回答し、特に最高評価が昨年度より13ポイント増加したことから、教育内容の改善が学生の成長実感として表れていると考えられる。設問3では、実習での経験が成長のきっかけとして最も多く挙げられ、講義と実践を連動させたカリキュラムが、専門性の理解と主体的学修を促進していることが示唆される。また、知識・技能の修得に加え、コミュニケーション力の向上が認識されており、ディプロマ・ポリシーに沿った教育効果が確認できる。

学生支援の面では、教職員の親身な関わりや相談しやすい環境が高く評価されており、支援体制が学生の安心感と満足度を支えている。評価できない点や不足点に関する指摘が見られなかったことから、学生支援は概ね適切に機能していると判断できる。

学修成果については、進路満足度および入学満足度がいずれも9割以上と高く、教育内容と進路支援が学生の将来形成に有効に結び付いていることが明らかである。今後は、これらの成果を客観的指標として整理・可視化し、さらなる教育の質保証につなげていくことが求められる。

2. 食物栄養学科

設問2「本学での授業や活動を通して、自身が成長したと思いますか」について

5点満点で回答を求めた。その結果「5点」が32%（昨年度49%）、「4点」が38%、「3点」が32%であり、「2点」、「1点」はいなかった。昨年度より「5点」が17ポイント減少した。

設問3「成長できた、と思うきっかけや経験を教えてください」について

自由記述で回答を求めた。回答数34件のうち、30%が実習・実技・インターンシップなど「専門知識や技能の獲得」に関するものであった（昨年度36%）。次いで、人間関係・交流について対人関係の広がりといった「コミュニケーション」についてが26%、自己肯定感や内面的成長を実感したことが19%であった。実体験が成長実感に強く結びついていることが示された。

設問4「在学中に力をいれて取り組んだ項目を選んでください」について

選択式で複数回答を求めた。結果は「短大の勉強」が最も多く（19人）、次いで「アルバイト」（15人）、「資格習得」（14人）であった。また、「ボランティア活動」（10人）、「就職活動」「クラブ・サークル」（どちらも9人）であった。

設問5「本学での授業や活動を通して身に付いたと考える項目を選んでください」について

ディプロマポリシーの7項目とその他を加えた8項目から、選択式で複数回答を求めた。その結果、「知識」（25人）、「技能」（21人）および「コミュニケーション力」（17人）が身に付いたという回答が多く、一方で「表現力」は少数であり、例年と同様の傾向であった。

設問6「本学の教育内容にどの程度満足していますか」および、設問7「本学の評価できる、評価できない、不足している教育内容を記載してください」について

本学の教育内容について10点満点で評価を求め、評価できる点および評価できない点を記述してもらった。平均点は6.85点（昨年7.91点）であり、8点の回答数が35%、5点以上が91%であった。

設問7では15件の回答があり、評価できる点は4件あり、実習や学習内容の充実や、外部とのつながりなどが挙げられた。不足している点は8件あり、授業の質に教員間のばらつきがある、学生同士の学習意欲（機運）の差があること等のほか、教育環境・設備に関する意見があった。

設問8「もし身近に進学希望者がいる場合、本学を勧めたいと思いますか」について

5点満点で回答を求めた。その結果「5点」が18%、「4点」が26%、「3点」が32%、「2点」が15%、「1点」が9%であった。

設問9「卒業後の進路は希望に沿ったものですか」について

5点満点で回答を求めた。その結果「5点」が35%、「4点」が18%、「3点」が35%であり、例年に比較して希望する進路とのギャップを感じていること窺えた。

設問 10 「函館短期大学に入学してよかったですか」について

5 点満点で回答を求めた。その結果「5 点」が 26%、「4 点」が 26%、「3 点」が 35%、「2 点」が 12%であった。

以上より、食物栄養学科卒業時アンケートの結果から、本学科の教育は一定の学修成果を上げているものの、学生の評価や満足度に低下傾向が見られ、教育内容や学修環境の改善が課題として浮かび上がった。

教育課程に関しては、設問 2 では、自身の成長について肯定的に捉える学生が多数を占めた一方、「5 点」の割合は前年度より 17 ポイント減少し、「3 点」が 3 割を占めたことから、成長実感の度合いにばらつきが生じていることがうかがえる。設問 3 では、成長のきっかけとして「実習・実技・インターンシップ」が最も多く挙げられ、実体験を重視したカリキュラムの有効性が示されている。また、設問 5 においても「知識」「技能」が身に付いたとする回答が多く、専門職教育としての基礎的機能は維持されていると評価できる。一方で、成長実感の最高評価（5 点）が前年度より減少しており、実習や授業で得た学びを学修成果として十分に実感・定着させるための振り返りや指導方法の工夫、ならびに表現力を育成する教育の強化が求められる。

学生支援の面では、教育内容全体への満足度が前年度より低下しており、課題が顕在化している。自由記述では、授業の質に教員間のばらつきがあることや、学生同士の学習意欲の差、教育環境・設備面に関する不満が複数挙げられた。これは、学生支援が個々の教員の取り組みに依存しており、組織としての支援や教育環境整備の不十分さが学生の評価に影響している可能性を示唆している。今後は、FD を通じた授業改善の共有や、学修環境の整備を含めた支援体制の再点検が必要である。

学修成果については、否定的評価は見られないものの、成長実感、進路満足度、入学満足度のいずれにおいても評価が分散している。特に「3 点」評価の割合が高く、学生が学修や進路について「一定の成果はあるが十分ではない」と感じていることがうかがえる。知識・技能・コミュニケーション力の向上は認識されている一方、期待した成長や将来像とのギャップを感じる学生も多い。今後は、学修成果を可視化し、学生自身が成長を自覚できる仕組みを整えることが、満足度向上と学修成果の定着につながると考えられる

以上